親子をつなぐ「昔ばなし」

「むかし、むかし、あるところに…」から始まる昔ばなし。

特別、本を読んだ記憶もないのになぜかストーリーを知っているのは、小さい頃、お父さんやお母さんが枕元で語り聞かせてくれたからでしょう。そして、そのお父さんやお母さんも、やはり小さい頃、寝る前のひとときに親から語り聞かされていたのかもしれません。

昔ばなしには先人の知恵がつまっており、人生教訓に例えられます。

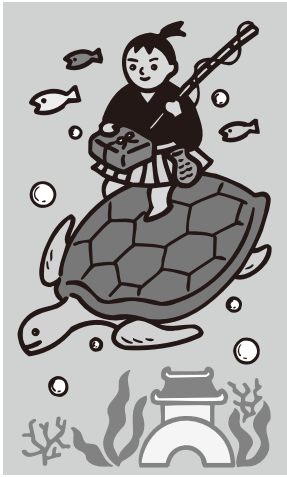
悲しい別れがあれば幸せな出会いがある。だましだまされたりすることで人のずるさや良心を学ぶ。親孝行の尊さ、自然への敬意など、人生の奥深さを楽しく教えてくれるのが“昔ばなしの魅力”でしょう。

「大きな桃がどんぶらこ　どんぶらこ」
「ココ掘れ　わんわん」
「鏡よ鏡よ、鏡さん。世界で一番美しいのはだぁれ？」

こんな印象的なフレーズが子どもたちの興味をそそり、繰り返し何度も聞くうち、“知恵”が自然と子どもの心に蓄積されていくのだと思います。このことからも、昔の人は聞く耳を持たせる術に長けていたようです。

いずれ子どもも人生の困難に直面します。
その時、「昔ばなし」という引き出しに入っている知恵に助けられるかもしれません。

そして、今度は自分たちが親になり、先人の知恵を「昔ばなし」という形で我が子に受け継いでいくのかもしれません。

「昔ばなし」はなんだか、世代をまたいだ壮大なバケツリレーのようですね。

さぁ、今夜はお子さんにどんな「昔ばなし」を読んであげますか？